

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 第 号
------	-------

氏 名 寺澤 知美  
論文題目 現代中国語の方位詞“上”と“里”に関する研究

### 論文審査担当者

主 査	名古屋大学准教授	丸尾誠
委 員	名古屋大学教授	柳沢民雄
委 員	名古屋大学教授	楊曉文

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、現代中国語の方位詞“上 shang”と“里 li”の用法について考察したものである。各種方位詞の中でも特に使用頻度の高い“上”と“里”を取り上げ、共起する名詞の持つ意味特徴が両者の選択に与える影響を分析するとともに、意味的・統語的側面からそれぞれの方位詞の持つ文法的特徴を明らかにすることを主な目的としている。あわせて、方位詞“上”、“里”と「類似」あるいは「対比」の関係にある“中、内、外、下、前、后”などの方位詞との比較分析も行われている。以下、本論文の概要と評価について述べる。

## [本論文の概要]

本論文は全 6 章からなり、これに序章と終章が加わる。

序章では、本論文の目的および各章の構成が述べられている。本研究の中核となる考察対象は方位詞“上”および“里”であり、主に相互の置き換えの可否という観点から、類似する機能を持つこの 2 つの方位詞の特徴を明らかにすることを目的としている。また、方位詞“上”、“里”の選択は共起する名詞、動詞、補語、介詞のみならず、使用されている構文や形式、視点、文脈など様々な要素による影響を受けるが、その中でも特に大きな影響を与える要素の 1 つである名詞の意味特徴に焦点をあてた考察の有効性が示されている。

第 1 章では、現代中国語の方位詞に関する諸問題が概観される。方位詞に関連する問題には、大きく分けて、複数ある方位詞のうちのどの方位詞を選ぶのかという「方位詞の選択」に関わる問題と、方位詞を付加する必要があるか否かという「方位詞の付加」に関わる問題の 2 つが挙げられる。方位詞の選択、および付加について考察する場合、名詞の持つ意味特徴だけでなく、共起する動詞・補語をはじめとする様々な要素についてもあわせて考慮する必要がある。たとえば、動詞のケースについていえば、“包[包む]、藏[隠す]”のように「内包関係」を表す動詞の場合には“里”との共起が優勢となることから、これらが方位詞の選択に一定の影響を与える可能性があるといえる。しかしながら、実際には“上”、“里”のどちらとも共起が可能な動詞も数多く存在し、さらに、「内包関係」を表す動詞であっても、“上”と共起する場合もある。たとえば、動詞“插”[挿す]は「内包関係」を表し、通常“里”と共起することが多いものの、“生日蛋糕上插着十根蜡烛。”[誕生日ケーキに 10 本のロウソクが挿してある。]のように“上”と共起する例もみられる。本論文は、共起する名詞が方位詞“上”、“里”の選択に与える影響を中心に考察するものであるが、第 1 章では名詞以外の要素による影響、および「方位詞の付加」に関する問題について取り上げることによって、方位詞選択のメカニズムの解明を目指している。

第 2 章および第 3 章は、方位詞“上”、“里”の選択に関わる問題について、「具体的な空間を表すケース」と「具体的な空間を表さないケース」の 2 つに分けて考察したものである。方位詞“上”、“里”は、“桌子上”や“房间里”のように具体的な空間を指す場合のみならず、“我经常在电视里/上看到他。”[私はよくテレビで彼を目にする。]のように物理的な位置関係を表さない場合にも用いられる。第 2 章では、前者のような具体的な空間を

## 論文審査の結果の要旨

表す名詞、および三次元的特徴を持つにもかかわらず例外的に“上”と共起する「乗り物」に関する名詞を取り上げ、名詞自体の持つ意味特徴が方位詞選択に与える影響を中心に考察を進めるとともに、選択される方位詞によって生じるニュアンスの違いについても言及している。二次元的特徴の顕著な名詞には基本的に“上”が選択されるが、次元の特徴に焦点が置けない場合には、二次元的特徴の顕著な名詞であっても“里”と共起するケースがみられる。本章では、どのようなケースに話者が対象を1つの範囲として認識し、「一定の範囲内」を表す“里”を選択するのかについて、話者の視点という観点からの分析が試みられている。

第3章では、第2章における考察結果をもとに、“报纸”[新聞]、“电视”[テレビ]、“电话”[電話]などの文字、映像、音声といった各種情報媒体を例にとり、「具体的な空間を表さないケース」を対象に検討が行われている。情報媒体としての役割を持つ名詞は一部の例外を除き、基本的に“上”、“里”のいずれとも共起が可能なケースが多い。たとえば“书”[本]の場合、“上”、“里”のどちらも用いることができるものの、文脈から具体的な本のページを指すことが明らかな場合には“上”との共起が優勢となる。本文ではその理由について、本のページと（そのページを見ている人の）視線の間に存在する一種の接触関係が関与していることを挙げて論証を試みている。

第4章および第5章は、方位詞“里”の用法について、“里”と類似する機能を有する“中、内”との比較を通して考察したものである。方位詞“里、中、内”のうちの“里”と“中”についてはその用法に似通った部分が多く、先行研究においても、両者は同等に扱われることが少なくない。しかし、実際には“里”が口語的な場面に多用されるのに対し、“中、内”は書面語に多く用いられる傾向があるなど、文体の違いをはじめとしたいくつかの相違点が存在する。これらの方位詞について、第4章では主に“里”と“中”の違いが顕著に表れる「空間構成に関わる名詞」（“窗”[窓]、“墙”[壁、塀]など）、および“里”と“内”の違いが顕著に表れる「明確な範囲を持たない名詞」（“天空”[大空]、“田野”[田野]など）を取り上げて考察が加えられている。“里”には大きく分けて2つの用法がある。1つは三次元的空間の内部を表す場合であり、もう1つは一定の範囲内を表す場合であるが、後者の用法については適用範囲が限定的であるという特徴がみられる。たとえば、“报纸”[新聞]の場合、「紙」という物理的なかたちを有することから明確な範囲が存在するものの、“报纸”を1つの範囲として捉える認識には結びつかず、“报纸里”は「複数紙の新聞の中」を指す場合や「内包関係」を表す場合のみに用いられる。同様に、“窗里”という表現は「窓枠の中」という意味は表さず、「窓の内側」の空間を表す。第4章では、とりわけ近い機能を持つとされる方位詞“里”、“中”、“内”の用法を比較することにより、それぞれの方位詞の持つ特徴を明らかにするとともに、“里”および“内”に求められる「範囲」についても考察されている。

第5章では、方位詞“里、中、内”と「身体部位名詞」との共起関係を例に挙げて、文体的特徴と方位詞選択との関連性について検討されている。一般に“里”は口語、“中、内”

## 論文審査の結果の要旨

は書面語に用いられることが多いとされるが、共起する名詞自体の文体的特徴については、“目”〔目〕のように書面語的特徴が顕著な場合、あるいは“脑袋瓜儿”〔頭〕のように口語的特徴が顕著な場合についてのみ、方位詞“里、中、内”の選択において一定の影響が認められる。また、文体的特徴が特に顕著ではない場合についても、どちらかといえば口語的な色彩を帯びる名詞は“里”と共起しやすく、書面語的な色彩を帯びる名詞は“中”と共起しやすくなる傾向がみられる。ただし、“里”と共起しやすい口語的な色彩を帯びる名詞であっても、あえて“中”や“内”と共起させることにより、表現全体に書面語的なニュアンスを持たせるケースも存在することなどが指摘されている。

第6章は、方位詞が時間表現に用いられるケースについて論じたものである。中国語の方位詞の中には、本研究の主な考察対象の1つである“上”のように、空間的位置関係を表す場合（例：“桌子上”〔机の上〕）だけでなく、時間を表す表現（例：“上（个）星期”〔先週〕）にも用いられるものが存在する。本章では、“上”および時間表現に多用される“前”、そしてこれらと対をなす“下、后”を取り上げて分析している。なお、これらの方位詞のうち“前、后”については、〔+過程〕の特徴を持つ語と共起する場合に多義が生じることが先行研究で指摘されているものの、実際には、前置される要素によってはどちらか一方の意味として用いられやすくなるケースも少なくない。たとえば、“电影前～”の場合には「映画の最初の時間」を表し、「映画の開始前」の意味を表すためには、相応の動詞を加える必要がある（例：放电影前～）。一方、他の動詞を付加しなくても後者のような意味を表すことのできるものについては多義的となる。こうした事象に対し、本章では「開始義」と「終了義」という観点に着目して分析が行われている。

最後の終章では、本研究の分析結果をもとに、方位詞“上”、“里”の用法が総括されている。“上”、“里”の選択において、共起する名詞の持つ意味特徴が最も顕著な影響を及ぼすのは「内部空間を有する名詞」（「乗り物」を除く）の場合である。すなわち、「閉鎖空間の内部を表すケース」については、方位詞が付加される場合には、基本的に“里”類（“里”、“中”、“内”）の方位詞が選択されることになる。一方、「二次元的特徴の顕著な空間を表すケース」については必ずしも“上”のみと共起するわけではなく、「一定の範囲内」を表す“里”が選択される場合もある。これは、それぞれの名詞の持つ最も顕著な意味特徴に常に焦点があたるとは限らないことを意味する。“上”、“里”の選択は、話者が外界の事象をどのように捉えているのかを如実に反映するものであり、両方位詞の用法の解明には中国語話者の空間認知の様式を明らかにすることが不可欠であると結論づけている。

## 〔本論文の評価〕

本論文は、現代中国語における各種方位詞の中でも、名詞との組み合わせにおいてとりわけ使用頻度の高い“上”と“里”の用法について、意味的・統語的側面から考察したものである。考察の根底には、両方位詞が結びつく名詞の意味特徴に基づいて、その使用の動機づ

## 論文審査の結果の要旨

けを探ろうとする姿勢が貫かれている。方位詞“上”と“里”には、“上”が二次元的特徴の顕著な場合に用いられる（例：桌子上[机の上]）のに対し、“里”は三次元的特徴が顕著な場合に用いられる（例：房间里[部屋の中]）という違いはみられるものの、実際には“沙漠里/上没有树，一棵都没有。”[砂漠には木がない。一本もない。]の“沙漠”のケースのように、“上”と“里”の置き換えが可能となるケースも少なくない。本論文では、こうした卑近ながらも外国人中国語学習者にとってはその使い分けが決して容易ではない言語事象を出発点に、中国語話者の空間認知様式の解明を目指すものであり、その試みは本文で考察対象として挙げられている名詞についてみた場合には、おおむね成功していると言える。また、考察の過程において随所に日本人の発想との相違点を意識した記述がみられる点にも、本論文の価値を見出すことができる。その研究成果は日中対照研究にも資するものである。

一方で、今回選定されている当該の名詞はあくまで先行研究にみられるものを基準としており、方位詞の用法に関するより包括的・体系的な理論構築を目指すのであれば、名詞の範囲をさらに広げる必要があったのではという問題点が審査員から指摘された。また、主張の客観性を保証するために導入されている大量の用例にみられる方位詞の使用に関する成立の可否については、論者が示すものと審査員（中国語話者）の間では語感に差がみられ、このことによる論証のプロセスへの影響が懸念される箇所がいくつか見受けられた。もっとも判断の揺れについては論者自身も認めるところであり、言語事実に即して言うところの研究の性格上、とりわけ今回のように発話者の認識というものが密接に関連しているような場合には、文法判断が分かれることは往々にしてありうるものの、論旨に関わる箇所に「個人差による影響を受けやすいといえる」（本文より）のような不確定要素を前景化してしまう記述があらわれていることが、本論文の意義・価値に若干ながら負の印象を与えてしまっている点是否定できない。

くわえて、文章に冗長な箇所があることなどの指摘もなされたものの、本論文における研究成果は中国語教育にも直結するものであるという実用的な側面も持ち合わせており、従来の当該項目に関する文法記述の充実・教授法の改善に貢献しうるものであるという点が高く評価された。

以上の評価に基づき、審査委員は全員一致して、本論文が博士学位論文として十分にその水準に達していると判断した。